全酪連会報 9

2025 SEP No.720

酪農とのかけはし／獣医師 寺内宏光先生

第76年度（令和7年度）通常総会開催される 詳細報告

第52回全国酪農青年女性酪農発表大会 意見・体験発表の部

ヨーグルトマニア（（一社）ヨグネット代表理事）向井智香氏
第52回全国酪農青年女性酪農発表大会にて講演

日本酪農見て歩紀／牧の地牧場（長崎県佐世保市）

酪農トピックス／全国農協乳業協会「令和7年度製造実務者向け研修」の開催について（酪農部）ほか

水際対策で家畜伝染病予防を！2

全酪新報ダイジェスト版

「農業経営統計調査」営農類型別経営統計にご協力ください

ZENRAKUREN

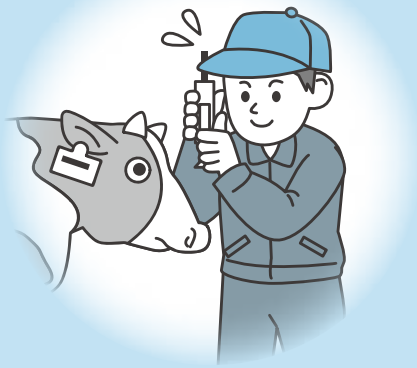
全酪連 定期刊行物のご案内／バックナンバーはQRコードから閲覧いただけます。

全酪連会報
➡https://www.zenrakuren.or.jp/kaiho/

COWBELL
➡https://www.zenrakuren.or.jp/cowbell/

全国酪農業協同組合連合会

酪農とのかけはし



第57回　獣医師

寺内宏光先生

獣医療で、農家・牛・消費者に幸せを届ける!!

今回ご紹介するのは、「ミルクの国」ともいわれる栃木県で獣医師を務めていらっしゃいます寺内宏光先生です。

▲ 笑顔の寺内先生

寺内先生は、おじい様の代から続く獣医師の家系で、物心ついたころにはすでに獣医師を目指されていました。獣医師として地域の畜産に貢献したいという思いを常に持ち続け、栃木を代表する診療所を目指して、たゆまぬ努力をされていらっしゃる寺内先生のドラマを、先生の言葉とともにご紹介します。

獣医師になるための修業時代

大学に入る前、お父様がお仕事をなさっていたころは、大動物8割・小動物2割のバランスでお客様がいらしていたそうです。寺内先生は、ご自身が働き始めるころには小動物（ペット）の割合が増えているだろうと考え、大学では小動物をメインに学ばれました。

当初、寺内先生は、大学をご卒業なさってから、北海道で牛の研修を、その後に東京でペットの研修を受ける予定でした。

しかし、北海道の㈱トータルハードマネジメントサービス（以下THMS）での修業の時に、転機が訪れます。「生産獣医療（プロダクションメディスン）」との出会いです。

「生産獣医療」は、動物の病気を治療するだけでなく、健康状態を維持・向上させ、生産性を高めることを目的とした獣医療です。THMSは、アメリカにてプロダクションメディスンの修業を終えて帰国した黒崎尚敏先生が設立した酪農コンサルタント会社です。THMSは生産獣医療という考えを軸に、総合的な牛群管理を目指す獣医師部門、農場経営に直結する繁殖を担う授精師部門、ニーズに合った高品質体外受精

卵を生産する受精卵部門の、3部門が連携しながら酪農現場をサポートしています。

寺内先生『農家がもっとこういう牧場にしたいんだっていうのを一緒に実現していくパートナーとして、伴走してく。こういう獣医師の在り方がめちゃくちゃかっこよく見えて。』

THMSでは当時社長だった黒崎先生をはじめ、そこに勤めている獣医師が最先端の技術や文献をいち早く取り入れ、よりよい治療方法を模索し、切磋琢磨している姿に感化され、業界としての活気を感じたそうです。

「牛に全振りしよう！」そう心に決められ、THMSには2年間のところ、4年間に期間を延ばして修業されました。

▲ 寺内動物病院のみんなで「やー」

栃木を代表する獣医師になるために

時間は少し戻りますが、THMSで修業が始まってすぐの頃、栃木に帰省した時に2日連続で地域の農家が懇親会を開いてくれたそうです。1日目は酪農家が、2日目は和牛の繁殖農家が集まりました。

1日目の懇親会では、同世代の若い酪農家が集まりました。共済組合直営の診療所がない栃木には、後継者がいない開業獣医師が多い事実を知り、近い将来に獣医師が誰も来られなくなってしまうと危機感を覚えた農家までいたそうです。

寺内先生『北海道で修業した寺内のせがれが帰ってくるっていうのを楽しみにしてくれている若い農家さんがいっぱい待っててくれたんです。社会人1年目で、まだ何もできないのに待っててくれる人がいるってことに、僕はとても感動したし、この人たちを裏切っちゃいけないなって思ったんです。』

THMS在籍中は、この危機感を胸に、栃木に戻った後の取るべき行動について構想を練っていたそうです。後継者がいない開業医が引退していく未来に、栃木の酪農業を支えるインフラとして、寺内動物病院という組織をきちんと運営しつつ、栃木県内に診療空白地を作らないために、企業化することは必至だと考えたそうです。

寺内先生『寺内動物病院が存続する限りは安心して営農できるっていう状況を作るのが、僕の使命だと思っているんですよ。』

寺内先生は、獣医師の子供が獣医師になるというのは「ラッキー」だと考えています。お話を伺っていると、これまで家業として、地域の農

▲ 寺内先生と息子さん

家に支えられて76年間続けてこられた「ラッキー」な寺内動物病院を、今度は確実に100年、1000年先まで農家さんに恩返しをしていかなくてはいけないという使命感をとても強く感じておられました。そのためにも、家業を家族経営から切り離し、企業として自立させることで、寺内先生がいなくなっても地域の畜産を継続的に支える体制づくりを進めています。

実務的なところですと、業務の脱属人化を意識されています。「その獣医師さんでなければできない・わからない」という状況は、急な疾病など柔軟な対応が求められる酪農業界では致し方なく思えますが、寺内先生はこれを良しとしません。

寺内先生『何年も先も寺内動物病院が農家さんに貢献し続けられていれば、いずれ僕がいなくなる時が来ます。その時に誰でも任せられるような体制づくりを心掛けています。それは、結果的に従業員の為にもなるんです。好きなタイミングで休みが取れるようになることで、家族との時間を大切にできる。その支えを受けて、仕事もより頑張れる。パフォーマンスを上げるためにも、脱属人化は図っていくべきなんです。』

日本の牛飼いを元気にする

寺内先生『僕らは、安心と豊かさを提供することをテーマに、栃木に限らず日本の牛飼いを元気にすることを目指しています。』

寺内先生曰く、安心は、明日をストレスなく迎えられることを意味します。病気という不安要素がない状態を目指すことです。豊かさは、後継者が継ぎたいと思えるように儲けさせることです。

寺内先生『ラジオを聞いていてくれれば、僕がどんな人かが伝わるので、初対面でも信頼関係がある程度築けた状態で接することができます。地域に貢献する診療所を目指すうえで、大きな意味があると考えています。情報発信は、お金にはならないけど、収益以上に価値があって、絶対に外せない大事な仕事だと思っています。』

寺内動物病院で直接サポートできないところは、せめて情報提供を、ということでラジオを配信しています。忙しい農家さんでも、仕事をしながら勉強ができるようにという思いがあるそうです。2021年から現在まで途切れることなく配信されています。ラジオの配信を始められて2年が過ぎたころ、各所から様々なテーマで執筆や講演会を依頼されるようになったそうで、益々情報発信に力を入れていらっしゃいます。

寺内先生『THMSの黒崎先生は、2年間のアメリカでの修業中も、当時の酪農雑誌で日本に向けて、アメリカの酪農はこうだって記事を書き続けていたんですよ。自分の会社を作ってからも、全国で講演会やニュースレター等で発信は続けているので、それは僕の中ですごくロールモデルになっていますね。（中略）僕の恩師としての黒崎先生に誇れる自分であり続けるために仕事を頑張っている感じです。』

北海道での出会いと学びを糧に、栃木に根差した使命感と情熱を胸に、寺内先生は酪農の未来を見据えて歩みを進めています。日本中の牛飼いたちに安心と希望を届けるために、挑戦をし続けていかれることでしょう。

（M・T）

▲ お仕事中の寺内先生

第76年度（令和7年度） 通常総会開催される

詳細報告

本会は、7月24日㈭TKPガーデンシティPREMIUM京橋（東京都中央区京橋）において、第76年度通常総会を開催し、令和6年度の事業実績、剰余金処分案、令和7年度の事業計画案の承認を得るとともに、役員の補選を諮った。

午後1時、定刻開始となった総会の冒頭、挨拶に立った隈部洋代表理事会長は、会員並びに来賓各位の参集に対し謝意を述べた後、国内の酪農情勢について、「為替相場の円安基調に伴う配合飼料など生産資材の高値が継続しているものの、8月で合計3回の飲用乳価の値上げが実現したことに加え、子牛価格の回復や中国への乳製品の輸出再開の検討などもあり、酪農環境に明るい兆しが見え始めた状況にある。また、昨年11月福岡県で発生が確認されたランピースキン病だが、その後熊本県においても発生が確認された。以降は国、県、福岡県及び熊本県の各関係者の献身的なご対応により鎮静化となった。しかしながら依然として家畜伝染病の予防は極めて重要な状況であり、酪農現場での対策に加え各地空港での動物検疫広報キャンペーンを通じて関係各位と合同で水際対策を実施し注意喚起を行う所存である。令和6年度の生乳生産量は、夏場に過去最高水準の酷暑となった影響はあったものの、年末からの生産量の減少幅の縮小により全国の生乳生産量は前年を上回る結果となった。令和7年度については、経産牛頭数減少の見込みから減産予測となっているが、生産基盤の維持に向けた取り組みについて関係団体と協議し対策を検討する必要がある。しかしながら乳価の値上げによる消費動向は不透明な部分もあり、関係団体との連携を今以上に強化しつつ理解情勢活動や消費拡大運動に努める所存である。」と述べた。

また、全酪アカデミーの事業について、「設立から令和6年までに新しく3組が酪農家としてスタートした。その生き生きとした姿は周辺の酪農家にも刺激を与え、地域活動の源となっているようである。さらには、今年度中にも新しく酪農家が1組誕生する見込みであり、関係者一同準備を進めている。就農後もしっかりとした酪農経営を続けられるよう支援していく。全酪アカデミーでは、今後も賛助会員とともに、酪農生産基盤の維持に努める所存である。」とし、さらに、7月に岡山県で開催された全国酪農青年女性酪農発表大会について、「多くのご来賓、関係機関、全国の酪友が語り合い、切磋琢磨し、親睦を深め合う大変貴重な2日間となった。全国の酪農家には、これからも本大会を通じて、酪農のつながりを大切にしていただき、気持ちを高め合ってほしいと切に願うところである。」と述べた。

▲ 隈部会長

今年4月に新しく公表された酪肉近について「長命連産、国産飼料の利用拡大、牛乳乳製品の需要拡大に併せ、生産者や関係者が誇りを持ち、若い世代に魅力ある畜産業を実現するための方向性が示された。全酪連として、この方針に応えるため、会員組織強化や酪農関係団体との連携を深める所存である。」と述べた。

令和3年度に策定した全酪連将来

ビジョンについては、「基本姿勢として、『持続的な酪農生産基盤の構築』を掲げている。また、全酪連が実現したい未来として、『消費者の食卓が牛乳や乳製品によって笑顔で満たされるように、また、酪農家の食卓も笑顔で満たしたい』という思いを持ち、事業に取り組んでいる。この将来ビジョンに基づく具体策として、販売事業の強化、業務効率化を柱とした第十三次中期事業計画を策定し、事業を推進している。この計画を着実に実行し、現場の酪農家に寄り添う姿勢を明確にしつつ、我が国の酪農家が直面する、様々な課題に対応していく所存である。また、この計画を全役職員が認識し、全酪連が次の段階へステップアップすることを目指し、『NEXT STAGE全酪』を合言葉に、酪農家の皆様が前を向いて進めるよう励む所存である。」と述べた。

次に、令和6年度の本会の事業実績について、税引前当期利益で11億6,600万円となり、過去2期連続の赤字から脱却したことに伴い、出資配当を1.5%、事業分量配当を600円／tで諮ることとし、会員に対し深く謝意を示した。

最後に、「会員及び酪農家の皆様には、日頃から多大なご理解とご支援をいただいていることに改めて深く感謝するとともに、引き続きご協力を賜りますようお願いしたい。」として開会の挨拶を締めくくった。

本総会には来賓として、農林水産省畜産局・長井俊彦局長、農林中央金庫・爲井清文常務執行役員をはじめとして、一般社団法人全国酪農協会等関係団体からご臨席をいただいた。

農林水産省畜産局の長井局長は、出席者の酪農行政への協力、推進に対し謝意を述べた後、昨今の酪農業を巡る状況について「新型コロナ禍における生乳需給の緩和や生産資材価格の高止まりなどの影響を大きく受けている中、本年は6月に加工向け乳価が値上げされ、さらに8月には飲用乳価の値上げが予定されている。令和4年の円安に伴う資材高騰が始まって以降、6回目の乳価引上げとなり、酪農家の経営改善が期待される。こうした乳価の値上げは生産者の皆様が取り組んでこられた生乳需給改善の成果によるものだと考えている。また本年度も、貴会は全国協調の脱脂粉乳の在庫低減や生乳の円滑な需給調整に取り組まれており、ご尽力に敬意を表する。農林水産省も、引き続き脱脂粉乳在庫の低減及び牛乳・乳製品の消費拡大といった拡販の支援策で生乳需給の改善を推進するとともに、国産飼料に立脚した足腰の強い酪農経営の確立に向けた支援など、経営改善に必要な対策を措置し酪農経営の安定を図っていく所存である。

▲ 農林水産省 畜産局 長井局長

また本年度から始まった生乳需給安定クロスコンプライアンスについては、「取組への参加を拡大させ、内容についても状況に応じて改善・充実させていきたい。本制度が安定的に運営できるよう皆様方のご協力を賜りたい。」と述べられた。

さらに、4月に公表した酪肉近について、「生産者と乳業メーカーが一体となり牛乳・乳製品の輸出も含めた需要拡大に取り組む必要性が位置づけられた。酪農家が所得を向上させながら安心して生産していくためには、生産者と乳業メーカー双方が一体となり、牛乳・乳製品の需要拡大に向けた取組を拡充し、酪農や牛乳・乳製品の様々な価値を見出し広く訴求していくことや、国産飼料に立脚し安定した生産基盤を実現させることなどの論点整理が行われ、ここで示された今後の取組に向けた視点に実効性を持たせるため、Jミルクが業界の取組を整理し、数値目標などを設定する。」と述べた。

最後に、「酪農家の皆様方が、将来にわたって安定的に生産できる基盤を確保するためには、酪農乳業関係者及び地方公共団体が目線を合わせ、酪農及び牛乳・乳製品の様々な価値を見出し、需要拡大に向けて取り組むことが不可欠であり、関係者の積極的なご協力をお願いしたい。また本年も記録的な暑さであり、生産量の減少及び繁殖時期のずれに伴う翌年度の需要期の生乳生産への影響が懸念されている。夏場の暑熱対策の徹底や、受精卵移植技術などを活用した繁殖管理が重要であるため、引き続き牛乳・乳製品の安定供給に向け、暑熱対策についても支援していきたい。」と述べ、挨拶を締めくくった。

次に、農林中央金庫の爲井常務執行役員は、来賓挨拶にて総会開催へ

の祝意とともに、農林中央金庫の業務への理解・協力に謝意を述べられた後、前年度の日本経済が回復基調であった一方で円安および海外経済の減速といった課題が残ったことに言及し、「経済見通しが不透明な中、酪農生産基盤においては、資材高騰や飲用向け需要の低迷など、生産者にとっては非常に厳しい環境である。これらにより、酪農現場における離農数の増加が懸念され、酪農生産基盤への影響が大変危惧されるところである。

▲ 農林中央金庫 爲井常務

貴連合会は、持続的な酪農生産基盤構築を目指し、酪農生産物の販売強化や、酪農経営環境の安定化に向けて、生産者のニーズに寄り添った飼料設計や供給の提案等に注力していると伺っている。全国の酪農家の声を集約し、様々な課題解決や業界発展に尽力してこられた実績と積み重ねは、業界のみならず我が国の食料安全保障の観点からも極めて重要な役割を果たしていると確信している。改めて会員及び役職員方の日々のご尽力、及び隈部会長のリーダーシップに深く敬意を表したい。農林中央金庫は、系統金融機関として酪農協系統の振興に向けた金融対応はもとより、酪農関係団体の経営改善の取組支援、酪農生産基盤維持・発展に向け、貴連合会の取組を支援する所存である。」と述べられ、挨拶を締めくくられた。

その後、中島清氏（ふくおか県酪農業協同組合 代表理事組合長）を議長に選出して議事に入り、いずれの議案も賛成多数で原案どおり承認された。

▲ 中島議長

中島議長は議長指名直後の挨拶において、昨年11月に福岡県で発生した日本初のランピースキン病について、「発症牛の取り扱い、ワクチン接種、防疫対応など当初は大きく混乱したが、殺処分した発症牛に対する再導入の助成措置及び懸念事項となったワクチン接種牛の対米輸出問題の早期解決等について、農林水産省にご尽力いただいた。深く感謝申し上げる。」と述べた。また対米輸出問題のため、発生農場を起点とした半径20㎞圏内の農場からの家畜市場への受け入れ自粛で子牛の滞留問題が発生していた際の、弊会福岡支所からの哺育飼料提供及び受け入れ先確保に関する各方面への働きかけについて言及していただいた。さらに同支所が事務局である九州酪農団体協議会が行った防疫、防除（特にサシバエ）対策についてのWEB研修会を契機として本年3月に福岡県でサシバエ対策に取り組んだ際、同支所がハエ駆除剤の提供と散布の人員を派遣したことに対し、「本病の解決に向け共に歩んでいただいたことは心強く、諸問題に対し前向きに対処する原動力になったこと、改めて御礼申し上げる。これもひとえに酪農関係者のご指導、ご鞭撻の賜物と厚く御礼申し上げる。隈部会長が常に言及している『酪農に寄り添った組織』を実践いただき全酪連に対し敬意を表する。またご心配をおかけした全国の酪農関係者に対し心より感謝申し上げる。これからもより一層防虫・防疫に取り組んでいく。」と述べた。

議事終了後、小前副会長理事が閉会の挨拶に立ち、会員及び来賓に対し謝意を述べた後、中島議長に対し「滞りなく議事を進めていただき、感謝申し上げる。ランピースキン病については、非常にご苦労をされたと伺った。前向きに取り組んでこられたことに、敬意を表する。改めて防疫の重要さを痛感し、酪農家と酪農に関わる組織が取り組むべきことと再認識した。」と述べた。続いて、第75年度の経営状況について、会員を始め弊会事業の利用者に対して謝意を示し、「今求められている消費拡大を含め、酪農の理解醸成に努め、酪農専門農協である全酪連の役割をしっかり果たしていく所存である。今年度も、弊会の事業運営にご理解と協力をいただけるよう、よろしくお願い申し上げる。」と締めくくり、第76年度通常総会は終了した。

▲ 小前副会長

第52回

全国酪農青年女性酪農発表大会

意見・体験発表の部

先月号に引き続き、今月号では、7月17日㈭～18日㈮に岡山市「ホテルグランヴィア岡山」において開催いたしました「第52回全国酪農青年女性酪農発表大会」の、酪農意見・体験の部他をご紹介します。

▲ 終了後、発表者の皆様で記念撮影

酪農意見・体験の部

椎谷 美保さん（東北会議）が最優秀賞を受賞!!

古川 真弓さん（九州会議）が審査委員長特別賞を受賞!!

8月号でご紹介した酪農経営発表の部に続き行われた酪農意見・体験発表の部は、各会議から選出された5名により行われ、①酪農との関わり②周囲とのつながり③活動の広がり④目標と夢の実現性、の4つの観点から慎重に審査が行われました。発表内容は、審査委員長による審査講評にてご紹介いたします。

意見・体験発表の部審査講評

毎年この大会で発表をお聞きし、参加された皆さまとお話をして、酪農はまだ大丈夫だと心強く感じてきました。皆さまの熱心な理解醸成活動などによって、酪農家さんが大変らしい、大丈夫だろうか、頑張っていただかなきゃ！と、多くの消費者の皆さんが心配したり、応援したりしてくださっています。今年の発表者の皆さまも、大丈夫ですよ！と、力強く感動的な発表をしてくださいました。

審査委員長 **栗本まさ子** 氏
（公財）日本乳業技術協会 顧問

共働きの理想形、ここにあり。
酪農×家族のかたち

西日本酪農青年女性会議
雲岡阿耶 氏

山形出身でご両親とも会社員。動物好きの雲岡さんは、文化財の修復を学ぶため岡山の大学に進学。が、バイト先で夫と出会い、卒業と同時に結婚し雲岡牧場に就農。新生活は

超過酷でしたが、ご家族、特にお義母さまに助けられます。「子育てに集中してもいいよ。今しかないのだから」この言葉のおかげで心に余裕ができ、子育てもそして女性部や青年部の活動も楽しんでいます。

共働きのご両親のもとで育った雲岡さんは「酪農は共働きの理想形」とおっしゃいます。「『酪農』という仕事の中に私たちの生活がある」は、とても印象的で、こうした環境で育つお子さんたちは将来酪農に関わる仕事をしたいと夢を持ち、雲岡さんご自身も人工授精師と狩猟免許を取得し、そして、ホッとできる空間で牛乳乳製品を提供したい、というすてきな夢をお持ちです。

酪農はとても魅力ある職業だとおっしゃるご一家の夢が叶って、酪農界が元気になり次世代につながる職業になるように、私たちも心から願っています。

出会いが紡ぐ人生の物語
～Meet to Change of Life

関東甲信越酪農青年女性会議
秋山淳子 氏

工学博士の父、専業主婦の母、2人の姉と葉山のお嬢様として育った大の動物好きの秋山さんは、オハイオ大学に留学。帰国後、キャンペーンガールのバイトで出会ったイケメン営業マンにひかれて小さなIT企業に就職すると、社長は孫正義だった！さらに、不注意でメールを誤送信した相手に「一目惚れ」。それが今の夫！という、テレビドラマのような出会いを繰り返し、仲良く酪農に励む夫のご両親の後ろ姿を「私たちの将来の姿だ！」と直感し結婚。15年間は外資系企業に勤務した後、「ちょっと手伝ってみない？」と言われ就農。経営移譲後は、酪農の過酷さを痛感しつつ経営改善に着手。成果が出始めています。酪農女性部の活動も小学生たちとの交流も始めています。

外資系企業で培ったネットワークも活かしより多くの方々と出会い、そこから生まれるアイデアを大切にしながら新しいことに挑戦し続け、酪農業界全体が活気を増しよりよい未来へと向かっていけるよう、ご活躍を期待します。

夢を叶えた、その先へ
～モーモー母ちゃんDX

九州酪農青年女性会議
古川真弓 氏

幼いころから牛に興味を持ち、念願だった牧場に就職。お義母さまに見込まれ、あこがれて牧場に永久就職して14年の古川さん。早逝されたお義母さまの酪農教育ファーム活動を続けるため、改めて酪農教育ファーム認証牧場、ファシリテーターの資格を取得し、地域の皆さんに積極的にアプローチ。酪農の楽しさ、命の温かさを伝える活動や子どもたちのための酪農体験、出前教室にも取り組んでおり、モーモー母ちゃん2代目としてどんどん活動していこう、とおっしゃっています。

夫婦共通の楽しみでもある共進会では、学生たちに体験・経験の場を提供して「未来の酪農のホープたち」に力添えしつつ、とても優秀な成績をおさめています。耕畜連携による地域貢献にも積極的です。

武雄市内に1軒だけとなってしまった今、古川さんには力強くどんどん発信していただきたい。夢だと言う農業高校での講演も今すぐ実現していただきたい。パワフルな元祖肝っ玉母ちゃんの教え、思い出を胸に、モーモー母ちゃんDXを目指して、どうかがんばってください。

人との繋がりが私を酪農の道へ

北海道酪農青年女性会議
澤口裕斗 氏

酪農家の長男である澤口さんは、畜産大学卒業後、飼料会社に勤めて

いた2022年、ご両親の体調不良により急遽就農されます。

会社勤務で培った営業力を活かし、酪農の仲間や関係の会社、団体とネットワークを作り、情報収集、勉強会など高い向上心を持って活動し、たくさんの小さな「きっかけ」から始まるチャンスを逃さず掴み、これから目指す経営に向けて進んでいます。持続可能な経営、粗飼料の品質向上に加え、母校との研究連携、研修牧場としての機能による地域貢献を挙げ、現在は、コスト上昇への対応策として化成肥料の減肥など具体的な目標を掲げて計画的に取り組み成果が出つつあり、積極的な情報発信も始めています。

厚岸町の研修牧場となり、多くの人に酪農を体験してもらい、酪農のおもしろさを知ってもらい、酪農に携わる仲間が増えるための「きっかけ」に是非なっていただきたい。若くて頼もしいメンバーたちとともに、そして良きパートナーとともに、元気に取り組んでいただきたい。

牛の幸せは私の幸せ

東北酪農青年女性会議
椎谷美保 氏

非農家出身で、美容部員として百貨店に勤務していた頃に出会った夫が酪農家だったという椎谷さんは、初めて訪れた牧場で牛たちの可愛らしさと夫の働く姿のカッコよさにすっかり魅了され、ごく自然な流れで結婚し酪農家になりました。

就農当初、自ら勉強し「人間も動物も心身ともに健康で幸せで豊かになることが大切」というアニマルウェルフェアの考えに感銘を受けます。牛にとって快適な環境は人も作業がしやすいと手を付けはじめ疾病が減るなど改善がみられ、家族の理解が得られるようになります。現在はアニマルウェルフェアの指針に沿って牛の幸せのために取り組み、牛をしっかり見ることで疾病を予防でき乳量や子牛価格が上がる、牛が作業に協力的になる、仕事がどんどん楽しくなる、という良い影響をしっかり感じています。

酪農ヘルパーを利用してお2人で休日を楽しみ、酪農は楽しくてやりがいがある仕事！と言い切っています。酪農の魅力を、アニマルウェルフェアの大切さを、SNSも活用してどんどん発信し続けてください。

5名の皆さまのご発表は、様々な分野のたくさんの方々に聞いていただきたい素晴らしい発表ばかりで審査委員全員ものすごく悩みましたが、最優秀賞は東北会議代表の椎谷美保さんに決定しました。

全く別の分野から、昔ながらの牧場にアニマルウェルフェアの考えを持ち込み、見事に変えてしまい成果を出しとても楽しんでいる。心の底から牛が好き！その思いで発信するSNSで、牛のファン、牛推しが一般消費者の間に拡がっている。もっと拡がってもらえるよう椎谷さんの今後の活躍に期待します。

九州会議代表の古川真弓さんには審査員長特別賞を贈ることといたしました。永久就職を叶え、大変だということを一言も言わず、酪農の楽しさや魅力を伝える活動をどんどんなさっていて、さらに力強く発信し続けてくれるに違いない。古川さんには、今後、モーモー母ちゃんDXを極めていただきたいです。

北海道会議代表の澤口裕斗さんには、審査委員全員からのお願いです。化成肥料減肥の取り組みは成果が出始めていて楽しみです。2027年の0%を実現した際には、是非、酪農経営の部で発表していただきたいです。

「今は本当に辛くても、未来は明るそうだ！」「酪農ってこんなにいい職業だ！」「辞めないで！」「一緒にやろう！」と、どうか、活動や発信を続けてください。どうか皆さまは、酪農家という本当に素晴らしい人生を伸び伸びと楽しんで、お元気に歩み続けていただきますように！

（審査委員長　栗本 まさ子）

大会では、令和6年1月1日に発生した能登半島地震で被災された、石川県の生産者である久保貴光さんから『能登の酪農のいま』と題した現況報告をいただきました。『マスコミ報道しか知る術がないで

すが、リアルな実態は報道されていないので、いまだ復興されてないことを知って少なからず衝撃でした。』などの感想が寄せられ、各地の被災地に思いをはせる時間となりました。

酪農経営の部、酪農意見・体験の部それぞれの審査講評・表彰式ののち、全国酪青女会議の中山監事による大会宣言、長友副委員長による閉会の辞をもって全日程を終了しました。

ご協力、ご参加いただきました皆様、本当にありがとうございました。

▲ 第51回らくのうこどもギャラリーの表彰式も実施。特選に選ばれた村上陽香さんがお母さまと一緒に福島県からいらっしゃってくださいました。ダイナミックな構図に目を引き、圧倒的な迫力があり特選にふさわしい素晴らしい作品です。ご応募いただきありがとうございました。

全国酪農青年女性会議 YouTube

今大会の発表者 11 名の発表内容を
全国酪農青年女性会議の YouTube チャンネルにて
ご覧いただけます。

➡ https://www.youtube.com/channel/UCwBHxHYIC4Y8w3Ks67NaNHg

アンケート結果

今回アンケートにお答えいただいた方は総勢73名。ありがとうございました。

学生さんからの回答も多く、20代以上で集計してみたところ、男女比はおおむね60：40でした。

同じく20代以上で参加回数を見てみますと、初めてという方が55％。2～3回という方は30％。10回以上という方も5％いらっしゃいました。初参加が半数以上の中で、全体の約8割の方が次回も参加したいと回答いただいています。

大会の構成や、発表者の方々の発表内容については、回答いただいたほぼすべての方々からネガティブなご意見はなく、『全国から色んな立場の方が集まって情報交換できる場は素晴らしい（40代女性）』、『初めて参加したが、多くの経営を知ることができとても良い経験になった（20代男性）』と自分の刺激になったという方がいる一方、『自分も結婚してから酪農に携わりいろいろ経験しましたが、中々楽しく酪農は出来ていないなと…（40代女性）』という羨望も少し。また、『学生さんたちが興味深く発表を聞いており、自分も参加して良かった。（20代男性）』、『若い酪農家の実状とその想いがよくわかりました。まだまだ酪農に明るい希望があると確信できました。（50代男性）』など将来の明るい兆しを見つけた方もいらっしゃいました。

皆様、アンケートにご協力いただきありがとうございました。

次回は、令和8年7月9日㈭～10日㈮に沖縄県那覇市「ロワジールホテル・那覇」にて開催予定です。皆様笑顔で来年もお会いしましょう。

ヨーグルトマニア（一社）ヨグネット代表理事）

向井 智香 氏

第52回全国酪農青年女性酪農発表大会にて講演

ヨーグルトマニアであり（一社）ヨグネットの代表理事を務める向井智香氏は、SNSで3，300種類を超えるヨーグルトをレビューし、全国の牧場・乳業メーカーを巡って独自に収集した情報をもとに、ヨーグルトにおける「乳」の魅力の発信に力を注いでいます。そんな向井氏を7月18日開催の全国酪農青年女性酪農発表大会にお招きし、ご講演いただきました。

向井氏は、2011年に森永乳業㈱から発売されたギリシャヨーグルトとの出会いが現在の活動の原点といい、「ヨーグルトは、乳製品の中でも1番と言っていいほど〝語られない〟商品。酪農と結びつかず腸活ばかり取り上げられることが多く、もっと乳の話と絡めて取り上げてほしい」と牛柄のシャツでご登壇いただきました。

『日本にはヨーグルトの定義がありません。「発酵乳」というカテゴリーに纏められ、チーズやアイスクリーム等に比べてはっきりした規格や成分による分類がありません。』と目からウロコの情報。『それぞれ原料や製法による価格差があるにも関わらず消費者には分かりづらく、乳を使用していない商品にも〝ヨーグルト〟という言葉が使用されてしまうなど、乳製品より発酵食品としてのアイデンティティが先立ってしまっているが故の混乱もあるように感じます。』と話します。

講演で向井氏は、紀元前数千年に西アジアで偶然に発見された今でいう発酵乳は飛鳥・奈良時代に日本に上陸し、我が国で初めて商品化されたのは大正時代になってからという歴史を紹介し、ヨーグルトは栄養面や副産物活用など様々な点で優れた食品であることをご説明いただきました。

そして向井氏は、蒜山ジャージープレーンヨーグルトなど各地のご当地ヨーグルトをその特徴を交えて紹介しつつ、酪農から得られる堆肥が痩せた土地を豊かにし農業が基幹産業となった地域の事例をあげるなど、日本の農業には酪農が必要だと力説されました。

最後に向井氏は、戦後日本の乳製品の消費動向を、年代を追って大きく4つに分け分析します。欧米人との対格差に気付き乳に栄養価を求めた『滋養強壮』の年代。乳脂肪のニーズの高まりから加糖ヨーグルトが広く商品化された『嗜好性』の年代。腸活に代表される乳脂肪カットや高タンパク質を求めた『健康管理』の年代。これら3つの年代は〝自己への支出〟ととらえ、今、コロナ禍以降予測できない自然災害や人災等を踏まえた4つ目の『未来の選択』の年代となり、これからは日本の一次産業の持続可能性に着眼した〝社会性を含んだ支出〟をしていきたいと述べられました。

あっという間の1時間でしたが、参加した皆様からは、『ヨーグルトの奥深さを知ることができ良かった』や『機能性より食品としておいしく健康的である事が重要という考え方に賛同します』『ヨーグルト市場を一緒に盛り上げたい』などの感想をいただきました。

ご当地ヨーグルトの魅力を伝える団体として（一社）ヨグネットを立ち上げ、展示会や百貨店等での催事等で地域の生乳を使ったご当地ヨーグルトを紹介しつつ、酪農・乳業の価値を日々伝えています。講演で、各地域のご当地ヨーグルトを多数ご紹介いただきました。皆さんも遠方にお出かけの際は、ご当地ヨーグルトを是非購入して、食べ比べをしてみてはいかがでしょうか。

日本酪農見て歩紀 No.387

（農）牧の地牧場
長崎県佐世保市

次世代を担う酪農経営を目指して

▲ 右から、泰広さん、奥様の裕子さん、従業員さん

地域の紹介

（農）牧の地牧場がある佐世保市は、長崎県北部に位置し海・山・街が融合した港町でかつては軍港として栄え、現在も米軍基地があり国際色豊かで魅力あふれる町です。自然が生み出した芸術と言っても過言ではない九十九島は西海国立公園に指定されており、大小208の島々が織りなす美しいリアス式海岸と聞けば、紺碧の海に島々が浮かぶ景勝地を思い浮かべる方も多いのではないでしょうか。

また、市内には日本最大級のテーマパーク「ハウステンボス」があり、ヨーロッパの街並みを忠実に再現し、季節折々の美しい景色やアトラクション、イベントなどが楽しめます。

▲ 九十九島公園からの展望

▲ チューリップ祭り（ハウステンボス）

食においては、ボリューム満点の佐世保バーガーが有名で、地元の方にも観光客にも人気のグルメとなっています。それに全国でも珍しいB級グルメ、戦後から人々に親しまれてきたロケット型のチューチュー容器に入った甘い豆乳「佐世保豆乳」は、地元では懐かしい味として、思い出とともに愛され続けています。

▲ ボリューム満点＆豪快な見た目

▲ 凍らせて食べるのも人気

牧場の沿革・概要

今回取材させて頂きますのは、長崎県で一番規模の大きい酪農組合であるながさき県酪農業協同組合（宮本貞治郎代表理事組合長）に所属する（農）牧の地牧場です。当組合で一番の生乳生産量を誇る牧場です。

ながさき県酪農業協同組合は長崎県酪農業協同組合連合会（中村隆馬代表理事会長）の会員であり、出荷戸数は60戸（令和7年3月31日現在）、令和6年度生乳受託乳量は25，264tとなっています。

◀ 牧場の案内看板

▲ 牧場の外観、景色

▲ タンク

当牧場の代表である前田利保組合長と息子さんの泰広さんにお話しを伺いました。

〈沿革〉

昭和50年4月	国の構造改善事業でいち早く法人化し牧場を開設。開設当初は成牛80頭、子牛30頭から始まる。
昭和53年10月	10ha分の土地を購入し自給飼料の作付けにも着手。
昭和60年	徐々に飼養頭数が増え成牛150頭、子牛50頭まで増頭。
平成15年	スタンチョン繋留だった牛舎をフリーバーン牛舎に新築。成牛200頭、子牛100頭まで増頭。
現　在	成牛300頭、子牛150頭の飼養規模となる。

「牧の地（まきじ）」という名前は、この地区の地名からとられたそうです。

▲ フリーバーン牛舎

▲ 搾乳牛舎の様子

〈現在の概要〉

飼養規模は大きく変えていませんが、自給飼料の作付け面積を10haから40haまで拡大し、さらに近隣の耕作地を有効活用しています。ただ、佐世保地区は平地が少ない土地柄のため1枚毎の畑の面積は小さく、それ故にどうしても作業効率が悪くなります。耕作放棄地もあるので作付け面積自体はまだ増やす事が出来ますが、現状は今の面積が限界との事でした。

▲ 自給飼料のロール

開設当時は今より作付け地が狭く機械が入らないため、一畑一畑を手作業で刈り取りをするハードワークで、それを乗り越えて今の広さまで拡大されたそうです。

泰広さんの主な業務は、育成から搾乳牛に係る管理全般を担っています。基本、初妊牛や経産牛導入はせず、自家育成で牧場を回しています。その為、授精も泰広さんを含めた従業員3名で行っています。また、育成から搾乳牛に係る飼養管理も、泰広さんが担当しています。

搾乳牛の給与体系はTMRで、朝夕1回ずつTMRを作り、その日の採食量を見ながら調整しています。

生乳生産量向上への取組

経営・飼養管理・乳質など主に力をいれていること、工夫されていることをお聞きしました。

「経営に関しては、何よりも人材確保をどうやっていくかに重点を置いています。法人化したのもこの側面があります。勤務体系を確立し、休日、給与（賞与含む）、福利厚生などを整えており、従業員同士のコミュニケーションの場を兼ねて、朝・昼は休憩室で賄いを出すなどして、いかに人材確保に努めるかを念頭に置いてきました。」

▲ こだわりの乾乳向けTMR

「飼養管理面では、フリーバーン牛舎なので牛体が汚れないようオガ屑をこまめに入れ、敷料の水分調整には気を付けています。特に夏場は飲水量も増え床が濡れやすいので除糞も定期で行い、乳房炎の発生を抑えるように努めています。」

「搾乳牛の餌・管理はもちろんですが、乾乳牛の管理も大事にしています。クレイングラスを主体とした牧草ミックスに、配合飼料、ビタミン、強肝剤等をTMRにして飽食させ、採食量を落とさないよう細断長や肝臓のケアには特に気を付けています。他にも生乳生産の引き上げの為に、分娩前後は特にコストを掛けるようにしています。」

▲ 乾乳牛　たくさん食べてゆっくりしています

「ただ、昨今の酪農情勢を鑑みて、搾乳牛の餌をメインに飼料コスト削減に近年取り組んできました。具体的な策としてエコフィードやWCSといった副産物・国産飼料の利用、時期に応じた飼料設計による調整です。飼料設計については、AMTSの評価を見ながら行っています。まだまだ模索している段階ではありますが、（農）牧の地牧場の給与体系の確立が出来ればと考えています。」

▲ TMR製造風景

「生乳生産量の向上には、餌だけでなく繁殖が回らないことには始まりません。牛群検定に加入していなかったので個体能力が不透明でしたが、近年ファームノートを導入し、選抜牛の個体成績を可視化するようにしました。平均授精回数は1・4回と少ない回数となり、初回授精平均日数が88日と少し遅れ気味になっています。分娩前後の管理も含め、そこが今後の課題と考えています。」

▲ 日々の作業風景

繋がり

佐世保管内の酪農家戸数は減少しているものの、泰広さんや他の後継者と年齢の近い世代が多い地区でもあり、情報交換の場を定期的に設けています。酪農情勢は厳しいですが、そんな状況だからこそ一致団結し、皆のモチベーションを高める場を大切にしています。また（農）牧の地牧場は、酪農の他に和牛子牛の生産も行っており、和牛農家との情報交換も頻繁に行っておられるそうです。

今後の展望と酪農業に望むこと

「牛群検定を今年8月から開始しました。ファームノートは以前から導入し選抜牛の繁殖や個体乳量を可視化し牧場の傾向を見てきましたが、今後は牛群検定のデータと合わせてより牧場全体の傾向を知り生産性向上に取り組んでいきます。

また、昨今の飼料情勢で輸入飼料に頼り切るには不安があり、自給飼料やエコフィード、WCS等の国産飼料の活用に力を入れていますが、どうしても水分が多いので運賃が割高になっています。もっと国産飼料を使いたいし、利用していくには運賃助成など行政の支援により、少しでも手に届きやすくなれば幸いです。」と泰広さんは考えています。

最後に

記録的な速さで梅雨が明けて気温が急上昇するなか、取材を受けていただき誠にありがとうございました。段々畑が多く景観が素晴らしい佐世保地区ではありますが、その裏には作業効率が悪く、思うようにいかない生産者の苦労を垣間見ました。酪農情勢をとりまく環境は依然厳しい状況の中、生乳生産量向上にひたむきに取り組む姿勢は、ながさき県酪協一番の生乳生産量を誇る牧場を自負しているものと感じました。今後とも、（農）牧の地牧場がますます発展することを祈念いたします。

（T・N＆G・K）

酪農部発

全国農協乳業協会「令和７年度製造実務者向け研修」の開催について

酪農部が事務受託している全国農協乳業協会（会長：濵名靖 榛名酪農業協同組合連合会 代表理事専務）は、会員企業の製造実務者を対象とした研修として、「アサーション研修」と「ヒューマンエラー研修」をANAビジネスソリューション株式会社から講師招聘し開催しました。

7月23日㈬には、製造部門の管理職に向けた「アサーション研修」を開催し、10会員から18名が参加しました。

アサーションとは、「自分も相手も大切にしながら、意見や気持ちを率直かつ正直に、そしてその場にふさわしい方法で表現すること」と定義されています。この研修では、意見の対立が起きたとしても、歩み寄り、双方にとって納得のいく結果を導き出すためのコミュニケーション方法を学びました。

部下や同僚とのやり取りにおいて、意図しない解釈からハラスメントに発展するケースや、部下が上司や同僚の間違いを指摘しにくい職場環境を改善するため、ANA社内で実施されている研修を参考にしています。

受講者からは、「職員との会話に悩んでいたため、とても勉強になった」「相手の気持ちを考えながら、自分の意見を伝える方法が理解できた」といった前向きな感想が寄せられました。

8月6日㈬には、「ヒューマンエラー防止ヒアリングコース」が開催され、9会員から19名が参加しました。この研修は令和4年度から毎年開催されており、今回は基礎コースを修了した方を対象とした応用講座です。研修では、事故発生時に当事者から正確な情報を聞き出すためのヒアリングスキルを学びました。

ANA整備部門での事故発生時の情報収集フローを基に、事前準備やヒアリングの具体的な手法、注意すべき点について学びました。

受講者からは、「今まで聞き取りの際に事前準備をしていなかったが、演習を通じて質問の準備がいかに大切かを学んだ」「事故当事者へ、ヒアリング協力への感謝を伝えることの大切さを学んだ」等、感想が寄せられました。

職場における円滑なコミュニケーションは、従業員の離職率低下や業務へのやりがい向上に繋がると考えられます。全国農協乳業協会は、今後もさまざまな研修を通じて、酪農家が大切に育てた生乳を安全・安心な乳製品として消費者に届けるという、製造メーカーの使命に応えていきたいと考えています。(A.Y)

▲ アサーション研修受講風景

▲ ヒューマンエラー研修受講風景

全酪アカデミー発

鹿児島県酪農業協同組合「令和７年度酪農後継者キッズ交流会」開催

令和７年７月29日㈫～30日㈬、鹿児島県酪農業協同組合（有村洋平代表理事組合長）主催の「酪農後継者キッズ交流会」が開催され、県内全域から13名の小中学生が参加されました。この交流会は、県内の酪農家の子どもたちが様々な体験や交流を通して、将来にわたり人生の仲間作りを図るために開催されています。

交流会の初日は「鹿屋市鳴之尾牧場（鹿児島県鹿屋市）」にて牧場見学を行いました。鳴之尾牧場は預託育成牧場で、鹿屋市の酪農家から後継牛を種付けから初産分娩の２か月前まで預かっています。

交流会に参加した子どもたちの中には自分の家の牧場から来た牛もいるとのことで、一生懸命探している姿が見受けられました。

翌日は「南日本酪農協同株式会社 鹿屋工場（鹿児島県鹿屋市）」での工場見学を行いました。

鹿屋工場は、大隅地区の生乳を受入れており、工場内では、瓶製品（牛乳と乳飲料他）やポリボトル製品（乳飲料）などの製造を行っています。

工場見学の最後に本社の方からいろいろなノベルティグッズを頂き、参加者の皆さんはとても喜んでいました。

初日は初めて出会った子どもたちも次第に打ち解け、帰る頃にはすっかり親友となっていました。ひと夏の思い出を作れたことと思います。

昨年に引き続き、全酪アカデミーの事務局もこの交流会に参加しています。交流会に参加した子どもたち、またその次の世代へと、この酪農業界のお手伝いができるように引き続き全酪アカデミーは“新規就農の取り組み”に取り組んでいきます。　（T.K）

▲ 鳴之尾牧場 牧場見学

▲ 南日本酪農協同株式会社 鹿屋工場 工場見学

酪農家になりたい！を応援します

全酪アカデミーの就農サポート

一般社団法人 Zenraku Academy

全酪アカデミー

❶ 迷わず最短。
酪農就農プロセス

❷ 手ごたえ実感。
最高の研修環境

❸ 生活安心。
研修中の給与支給有

※全酪アカデミーに**授業料の支払いはありません。**

お問い合わせ

一般社団法人 全酪アカデミー

〒151-0053　東京都渋谷区代々木1-37-2 酪農会館
TEL **03-5931-8070**（全酪連総務部内）
E-mail：zenraku_academy@zenrakuren.or.jp
URL：https://z-academy.org/
［担当：炬口、板倉、和田］

水際対策で家畜伝染病予防を！2

空港にて「動物検疫広報キャンペーン」を関係団体合同で実施

家畜の悪性伝染病である口蹄疫やアフリカ豚熱が東アジア諸国でまん延しており、3月には韓国において1年10か月ぶりの口蹄疫が発生、日本へ侵入するリスクが極めて高い状況が続いていることを受け、渡航者、入国者等に対し注意喚起を行うことを目的に、今年4月に福岡空港で実施した「動物検疫広報キャンペーン」に続き、移動が増える時期を見据え、仙台空港、中部国際空港においても関係団体と合同でキャンペーンが実施されました。国・県・生産者団体が協調・連携して今後も家畜伝染病予防に努めてまいります。

「動物検疫広報キャンペーン」仙台空港実施内容

1. 開催日

令和7年7月29日(火)

2. 参加者

動物検疫所北海道・東北支所仙台空港出張所、宮城県家畜防疫対策室、みやぎの酪農農業協同組合、宮城県酪農農業協同組合、全酪連仙台支所

3. 内　容

●空港出発ロビーにおいて海外へ出発する出国者へ、動物検疫所・検疫探知犬イメージキャラクター「クンくん」とともに、広報物の配布・声掛けによる口蹄疫等家畜伝染病の侵入防止の協力説明。

当日は夏休みを利用して海外へ旅行に出かける学生や国内線を利用する旅行者等も大勢おり、広く内容について周知ができました。外国から家畜伝染病ウィルス等を国内に持ち込ませないこのような水際対策は、酪農家をはじめとする畜産農家や、我々酪農関連団体にとっても非常に重要なことであり、今後もこのようなキャンペーンへの参加を続けていきたいと思います。

広報活動する「クンくん」▶

▼ 空港内キャンペーン掲示物

旅行者への協力説明 ▶

▲ 参加者集合写真

「動物検疫広報キャンペーン」中部国際空港実施内容

1．開催日

令和7年8月7日(木)

2．参加者

動物検疫所中部空港支所、愛知県酪農農業協同組合、岐阜県酪農農業協同組合連合会、三重県酪農農業協同組合、東海酪農業協同組合連合会、東海農政局、愛知県、三重県、全酪連名古屋支所

3．内　容

●「肉製品持ち込み禁止」などの広報用ポケットティッシュを、空港を訪れた観光客に手渡すなど啓発活動。

飛行機から降りて検疫カウンターまでに設置された「靴底消毒マット」を通ることによる靴底消毒の実施箇所、また動植物検疫探知犬による国内への持ち込みが禁止されている肉や肉製品等の探知が行われている現場視察も行い、しっかりと水際対策が行われている印象を受けました。

▲ 集合写真

▲ ティッシュ配布による啓発活動

◀ 配布用ティッシュ

▲ 動植物検疫探知犬

農林水産省　動物検疫所

●ホームページ
➡ https://www.maff.go.jp/aqs/

全酪新報

ダイジェスト版

全酪連、全農など
共同出資で乳製品製造会社設立
福島に生乳需給調整工場新設へ

全酪連はＪＡ全農、東北生乳販連、関東生乳販連との共同出資により福島県郡山市に新たな乳製品製造会社「らくのう乳業株式会社」を今年10月1日に設立することで4者が合意したと発表した。事業内容は脱脂粉乳、バター、生クリーム等の製造・販売。新会社及び新工場の設立により、引き続き関係者が連携して生乳需給調整機能を強化し、生産者の年間を通じた安定的な生産環境を整備するとともに、将来にわたり酪農生産基盤を支える。令和10年12月より生産開始予定としている。

新工場は酪王協同乳業㈱郡山工場の跡地に建設する。事業費は約164億円、資本金は19億2千万円（全酪連と全農が49・5％、東北生乳販連と関東生乳販連が0・5％）。処理能力は最大1日当たり400ｔ、最大貯乳量1千ｔ。新工場完成後には、長年に渡って生乳の需給調整機能を果たしている全酪連北福岡工場（岩手県二戸市）での生産を中止し、新工場に移管する。

（8月1日号）

農水省
適正な価格形成に向けたコスト指標
地域差等実態に考慮すべきとの意見

農水省は7月15日、省内で適正な価格形成に関する協議会の飲用牛乳ワーキンググループの第4回会合を開き、コスト指標作成にあたり考慮すべき論点を議論。地域差等の実態を踏まえたコスト指標作成、データ活用に留意して進めるべきなどの声が上がった。会合で出た論点を踏まえ、今後、関係者で具体的に詰めていくことで合意した。会合は非公開。農水省の説明によると、生産者・乳業者側からはデータの活用に関して、統計の平均値をそのまま使うと、地域によってデータが異なるケースがあるとの指摘があった。また、小売段階でも価格にバラつきがあるため、「シンプルな指標を一様に活用し、全てに適用できるかについては、難しい課題もあり、今後の検討が必要」との慎重な意見もあった。

一方、消費者・小売側からは「どのような前提でコスト指標が作成されたのか明確にする必要がある」「小売段階でも地域によって違いがあるため、それらをどう反映するのかが課題」との意見が出た。

（7月20日号）

▲ 農水省で開かれた第4回会合

ランピースキン病

まん延防止へ1年限定の政令施行 家畜伝染病予防法並の措置可能に

農水省は7月28日、牛の届出伝染病・ランピースキン病（Lumpy skin disease）に関して、家畜伝染病予防法に基づき新たな政令を施行。来年7月27日までの1年間、都道府県知事の判断による殺処分命令が可能となり、法定伝染病（家畜伝染病）並みの措置を講じることが可能になった。これに伴い、「ランピースキン病防疫対策要領」の一部を同日付で改正し、都道府県へ通知。今後の発生にも備え、まん延防止に向けた対応を強化した。

ランピースキン病はサシバエ、蚊などの吸血昆虫が媒介するウイルスによる疾病で、皮膚の結節や水腫、発熱症状等を呈し、乳量が大幅に低下するなど経済的被害が大きい。

令和6年11月以降、福岡県（19農場）と熊本県（3農場）で発生したが、媒介するサシバエ対策など、関係者の防疫対策により、12月26日の事例を最後に国内での発生は報告されていない。（8月1日号）

農水省・畜産統計

全国の酪農家戸数5％以上の離農続く 総飼養頭数減少も1戸当たりは増加

農水省がこのほど公表した令和7年2月1日現在の畜産統計によると、全国の酪農家戸数は1万1300戸で、前年に比べ600戸、5・0％減。コスト急騰等を背景に、令和5年より毎年5％以上もの酪農家が離農している状況が続く。全体の飼養頭数も減少が続く一方、1戸当たり平均飼養頭数は増加傾向で推移している（表参照）。

戸数を飼養頭数規模別にみると、「30～49頭」が2640戸（190戸減）で最も多く、次いで「50～79頭」が2360戸（100戸減）、「1～19頭」が2090戸（170戸減）。中小規模の経営に大きな変化は見られないが、昨年は増加した「100～199頭」は1450戸と10戸減少した一方、「200頭以上」は17戸増と200頭以上のみ増加した。（8月1日号）

1戸当たり飼養頭数トップ10　（頭）

順位	都道府県名	25年	24年	増減
1	三重	270.8	254.1	16.7
2	北海道	164.3	158.9	5.4
3	島根	152.2	147.2	5.0
4	大分	126.6	130.9	-4.3
5	和歌山	102.0	100.0	2.0
6	香川	99.6	92.2	7.4
7	茨城	97.0	92.8	4.2
8	栃木	96.8	95.5	1.3
9	愛知	95.7	93.0	2.7
9	熊本	95.7	94.1	1.6

全国の乳用牛飼養戸数・頭数（2025年2月1日現在）

前年比：％

	飼養戸数	前年比	飼養頭数	前年比
全国	11,300	95.0	1,293,000	98.5
北海道	4,970	96.1	816,800	99.4
青森	126	92.6	11,500	103.6
岩手	650	93.9	37,600	97.2
宮城	349	94.8	14,900	94.3
秋田	64	91.4	3,330	94.3
山形	166	96.5	9,950	103.0
福島	193	92.3	10,400	99.0
茨城	236	94.4	22,900	98.7
栃木	531	96.0	51,400	97.3
群馬	342	96.3	31,000	97.2
埼玉	120	91.6	5,810	91.4
千葉	342	94.2	25,200	98.1
東京	40	95.2	1,330	95.7
神奈川	106	90.6	3,790	94.3
新潟	122	91.7	4,650	92.1
富山	31	100.0	2,120	97.7
石川	32	91.4	2,640	90.1
福井	19	100.0	940	98.9
山梨	40	97.6	2,990	97.4
長野	203	91.4	12,700	97.7
岐阜	78	95.1	4,860	96.0
静岡	146	94.8	12,400	95.4
愛知	186	93.5	17,800	96.2
三重	26	96.3	7,040	102.6
滋賀	29	90.6	2,310	97.5
京都	42	93.3	3,630	96.8
大阪	21	91.3	1,080	100.9
兵庫	184	92.0	11,600	94.3
奈良	29	90.6	2,590	93.2
和歌山	5	100.0	510	102.0
鳥取	94	97.9	8,520	101.8
島根	69	95.8	10,500	99.1
岡山	170	93.9	15,100	98.1
広島	103	93.6	7,810	86.9
山口	47	95.9	2,350	97.9
徳島	66	97.1	3,030	88.6
香川	50	90.9	4,980	98.2
愛媛	70	89.7	4,280	95.1
高知	41	100.0	3,050	103.0
福岡	144	93.5	9,530	94.4
佐賀	28	87.5	1,740	95.1
長崎	104	94.5	5,360	95.4
熊本	438	95.8	41,900	97.4
大分	94	100.0	11,900	96.7
宮崎	187	93.5	12,400	95.4
鹿児島	124	94.7	11,300	94.2
沖縄	65	100.0	3,570	97.0

全酪新報

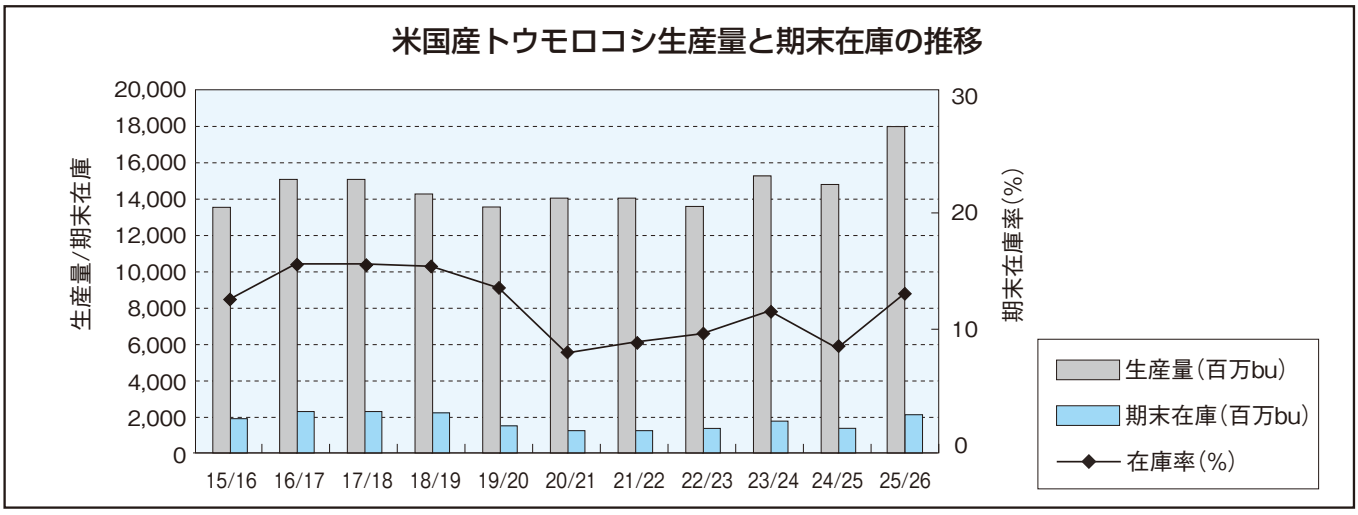
- 人が牛乳を必要とし、牛肉を必要とし、緑を必要とする限り、酪農は誇り高い永久の仕事です。
- 明日へ向かって前進する酪農界の動きを全酪新報は正確に報道します。時に怒りの声を、時に喜びの声を…幅広くお伝えします。
- ご家族でご愛読いただける酪農専門紙です。
- 毎月1日、10日、20日発行、年間購読料は6,600円（税込・送料込）です。
- お支払（請求書到着後）は、郵便振替、銀行振込、クレジットカード決済がご利用いただけます。
- 見本紙ご希望の方はお申し出下さい。無料です。（見本紙にバックナンバーは含まれません）

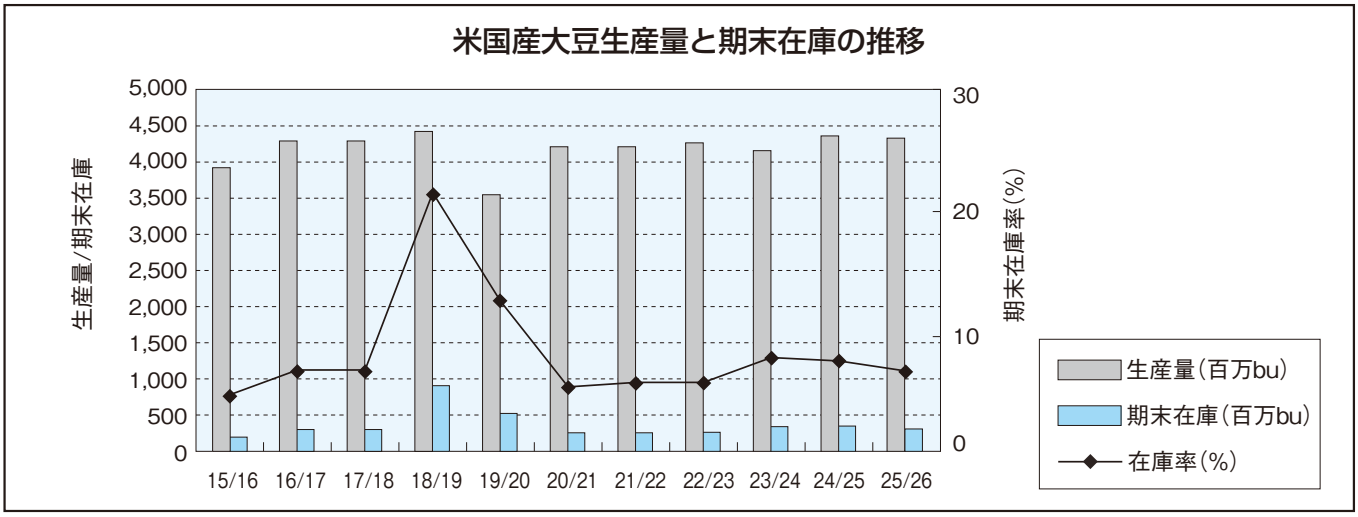
全酪新報／購読お申込フォーム

一般社団法人
全国酪農協会
電話 03（3370）7213
www.rakunou.org

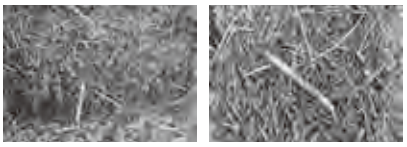
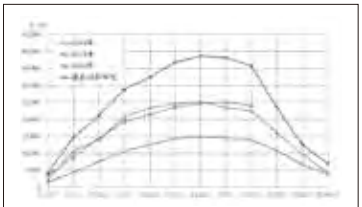
原料情勢　令和７年８月

		24/25年産	25/26年産
8月12日発表 米国農務省 トウモロコシ 需給予想	作付面積（百万エーカー）	90.6	97.3
	単　　収（ブッシェル/エーカー）	179.3	188.8
	生 産 量（ブッシェル）	166億5,500万	180億7,200万
	需 要 量（ブッシェル）	153億5,000万	159億5,500万
	期末在庫（ブッシェル）	13億500万	21億1,700万
	在 庫 率	8.50%	13.27%
トウモロコシ 相場動向	今回の需給報告では旧穀期末在庫は減少、新穀期末在庫は大幅増となり、予想を上回る新穀単収の引き上げの影響から軟調に推移した。米国・南米共に豊作見込であり安値で推移することを期待したいが、米中の関税協議の見通しは不透明なままとなっているため注視する必要がある。		
大豆粕 相場動向	米国・南米共に豊作予想となってはいるが、今回の需給発表で期末在庫が予想よりかなり少なかったことからシカゴ相場は堅調に推移している。今後は、米国の天候や米中関税協議の行方に注視する必要がある。		
糟糠類	【一般フスマ】　猛暑の影響か麺類やパスタに需要が集まったことで小麦粉の挽砕量が前年比増加している。飼料需要は弱い状況は変わらずである。		
	【グルテンフィード】　7-9月期にて上げ改定だったものの、全国的に引き続き需要が強いためタイトな状況は変わらずとなっている。		
海上運賃	海上運賃は堅調。大西洋の荷動きが引き続き活発であることに加え、豪州石炭の引き合いが急増したことから、船腹需給が引き締まり、相場が上昇した。原油は需要面では米国雇用統計悪化等で足踏み、供給面では産油国の増産姿勢といった材料を受け弱含みとなった。		





輸入粗飼料の情勢　令和７年８月

北米コンテナ船情勢	北米西海岸を中心とする航路では、本船スケジュールに乱れが生じており、主要な乗継航路を含め、慢性的な混雑が続いています。特に日本の主要港では、混雑が深刻となっているため、抜港や寄港予定地の変更、迂回ルートを臨時で増設していますが、根本的な解決となっておらず、状況は好転していません。そのため、一部の船会社はコンテナ搬出の催促や蔵置場所の確保のために荷揚げした貨物をオフドック（本船着岸岸壁から離れた場所）へコンテナを移送して置場所の確保を行っています。また、今後は台風が多く発生する時期となることから、荷役作業の遅れや本船の滞船も見込まれるため、更なる港湾混雑も懸念されています。北米航路では米中追加関税の一時停止措置により関税引き上げ前の船積みが急増しましたが、前倒し需要の反動と増便による供給過剰によって徐々に船舶のスペース不足は収まっています。
アルファルファ	【ワシントン州】　主産地であるワシントン州コロンビアベースンでは、25年産２番刈の収穫が終了し、３番刈の収穫作業が開始されています。２番刈の品質は、天候に恵まれたこともあり、色目が良く葉付きが良好な上級品が多く収穫されています。輸出向けの買い付け交渉は継続して行われていますが、１番刈取引開始の際と同様に、産地では高値で販売したい生産農家と、安価で購入したい輸出業者の間で折り合いがつかないケースが多く、取引は十分に進んでいない状況です。
	【オレゴン州】　オレゴン州南部クラマスフォールズでは１番刈の収穫作業が終了し、２番刈の収穫作業が開始されています。６月中旬～下旬にかけて降雨が発生したことで、一部の圃場で雨あたりの被害がありましたが、降雨被害前に収穫を終了した圃場では良品が発生しています。２番刈でも、収穫序盤に刈取した圃場で一部降雨被害が発生していますが、８月は好天が続く見通しのため、良品の生産が多く見込まれています。同州中部クリスマスバレーでは、例年、７月上旬には１番刈の収穫作業が終了しますが、今シーズンは降雨の影響もあり、７月中～下旬まで収穫が続きました。収穫時期に局地的な降雨や暴風雨があったことから収穫された１番刈の30～40%で雨当たりの被害が発生したため、上級品の発生は限定的となっています。また、ワシントン州同様に生産農家は輸出向けに販売するより、米国内酪農家に販売する方が高値で取引出来るため、輸出向けには売り渋りが多く発生しています。  ▲ 25年産１番刈オレゴン産アルファルファ ７月中旬クラマスフォールズ(左)クリスマスバレー（右)にて撮影
	【ネバダ州】　ネバダ州では２番刈の収穫作業が終盤を迎えており、早い圃場では３番刈に向けた収穫作業が開始されています。１番刈及び２番刈は収穫期を通して、降雨も少なかったことから収穫された品質は葉量が多く葉付きのよい良品が発生しています。ワシントン州やオレゴン州で高成分の発生が限定的となったことで、米国内向けで需要は堅調に推移しています。
	【カリフォルニア州】　カリフォルニア州南部のインペリアルバレーでは、４番刈の収穫が終了し、５番刈の収穫作業が行われています。産地では連日40℃を超える高温が続き、成分値が低く、色褪せたサマーヘイ中心の発生となっています。灌漑局の発表によると、７月15日時点でのアルファルファの作付面積は145,187エーカーとなっており、前年同期の142,463エーカーからやや増加しています。中国向けの出荷は再開されていますが、依然として不透明な状況が続いていることで需要は停滞しています。一方で、中東向けは馬糧向けを中心に堅調に推移しています。
米国産チモシー	主産地であるワシントン州コロンビアベースンおよびエレンズバーグ、アイダホ州では１番刈の収穫作業が終了しています。昨年同様に、春先は冷涼な気候で収穫期には好天に恵まれたこともあり、収穫された１番刈の多くは上級品となっており、中～低級品の発生は限定的です。輸出業者は23年産、24年産の繰り越し在庫を保有しておらず、昨年同様に低級品の発生が限定的なことから買付は旺盛に進んでおり、産地相場は堅調に推移しています。
スーダングラス	カリフォルニア州南部インペリアルバレーでは、１番刈の収穫が最終盤を迎えており、２番刈の収穫作業が開始されています。しかしながら、産地相場低迷により生産農家も作付意欲が低いため大半の圃場では１番刈で生産を終了し、秋野菜の生産に備えています。これまでに収穫された１番刈の品質は好天が続いたこともあり、上～中級品の発生が中心となっています。一部の輸出業者が保持していた旧穀の繰り越し在庫も解消され、積極的に買付を再開しており、産地相場は堅調に推移しています。灌漑局によると、７月15日時点でのスーダングラスの作付面積は23,986エーカーで、前年同期の13,879エーカーから増加しています。  ▲ インペリアルバレー　スーダングラス 作付面積推移（単位：エーカー）
クレイングラス	**クレインは全酪連の登録商標です。** 主産地であるカリフォルニア州南部インペリアルバレーでは、２番刈の収穫作業が終了しており、３番刈の収穫が開始されています。２番刈の収穫期間中は降雨もなかったことから柔らかく葉付きが多い良品が中心となっています。３番刈を行わず、既にDIP（休耕地政策）を実施している生産農家もいることから、例年この時期に生産される３番刈の生産量と比較して減少する見通しです。灌漑局の発表によると、2025年７月15日時点でのクレイングラスの作付面積は22,984エーカーとなっており、前年同期の21,119エーカーから増加しています。
豪州産オーツヘイ・ウィートストロー	７月は西豪州や東豪州では例年並、南豪州では例年を超える降雨がありました。現時点では、西豪州や東豪州では例年並の収量、南豪州では、播種時期の降雨不足が影響し、収量は昨年を下回ると予想されています。８月も各地域で降雨予報が出ているため、生育も順調に進むと予想されていますが、収穫期までの降雨量次第では収量へ影響を及ぼす可能性があることから引き続き注視が必要です。また、８月２日には豪州北東部のクイーンズランド州と南東部のニューサウスウェールズ州で、寒冷前線の影響により大雪に見舞われました。この雪により、市街では停電や車両の立ち往生が発生しましたが、今のところ国内の酪農家や、牧草生産への影響は出ていません。 ▲ 25年８月 豪州全域の予想降水量 （http://www.bom.gov.au/より引用）

※粗飼料情勢の全文は弊会ホームページに掲載しています。

「農業経営統計調査」営農類型別経営統計 にご協力ください

農林水産省による「農業経営統計調査」の営農類型別経営統計は、農家及び農業法人の経営状況を明らかにし、農政推進に必要な資料の整備を目的に毎年行う調査（標本調査）です。

調査結果は、「食料・農業・農村基本計画」の「（参考２）技術体系の将来像と経営モデル」において、各経営モデルを策定するための基礎資料に活用されるほか、補助金等の算定、固定資産評価基準改定のための基礎資料に活用されるなど、活用範囲は多岐に渡っています。

本調査については、調査協力者の皆様に御協力いただきやすいよう令和６年に調査票を見直した上で、民間事業者（株式会社サーベイリサーチセンター）に一部委託して実施しています。

本調査の趣旨を御理解の上、御協力賜りますようお願い申し上げます。

調査へのご協力をお願いします

農業経営統計調査
営農類型別経営統計

農業経営統計調査は
農政の推進に活用される国の重要な統計調査です

この調査は、農林水産省が統計法の規定に基づく総務大臣の承認を受けて基幹統計調査として実施するものです。

統計法では、調査を担当する調査員または職員（民間事業者を含む）が調査で知り得た内容を他に漏らすことは固く禁じられており、統計を作成する目的以外に使用してはならないことが定められています。このため、皆さまのプライバシーに関することは、関係者以外に漏れることはございません。

農林水産省

INFORMATION

北海道 乳牛産地情報

令和７年９月１日現在

札幌支所	TEL 011-241-0765
釧路事務所	TEL 0154-52-1232
根室駐在員事務所	TEL 01537-6-1877
帯広事務所	TEL 0155-37-6051
道北事務所	TEL 01654-2-2368

価格状況 ↑……強含み ↗……やや強含み →……横這い ↘……やや弱含み ↓……弱含み

事務所	畜種	相場(万円)	価格状況	管内状況
札幌管内	育成牛(10-12月令)	20～30	→	札幌管内の８月中旬までの生乳生産量前年比は、函館管内月計で103.2%、累計で102.3%、苫小牧管内月計で102.2%、累計で100.9%の実績となっております。９月の初妊牛動向といたしまして、11月下旬～12月中旬分娩が中心となります。秋分娩から冬分娩中心となります。出回り頭数も増えることが予想され、秋導入に向けての需要が回復してくることが予想されますので相場は横這いで推移すると見込まれます。腹別の資源については、F1腹、雌雄選別腹共に十分に確保できます。高能力・高成績牛を多く取り扱える地域ですので、相場が落ち着いているこの時期での導入をおすすめいたします。
	初妊牛	50～60	→	
	経産牛	35～45	→	
釧路管内	育成牛(10-12月令)	20～30	↘	根釧管内の８月中旬までの生乳生産量前年比は、釧路管内月計で104.1%、累計で104.1%、中標津管内月計で101.8%、累計で102.0%の実績となっております。９月の初妊牛動向といたしまして、11月下旬～12月中旬分娩が中心となります。初妊牛に関しましては、猛暑の落ち着く秋に向けて導入意欲は徐々に上がってくるものと思われ、相場は強含みで推移すると見込まれます。腹別ではF1腹の引き合いが強く、雌雄選別腹との価格差がありましたが、管内で新規就農向けの購買もあることから、雌雄選別腹の引き合いが強い状況が続くと見込まれます。育成牛に関しましては、夏分娩が期待される生まれ月の出回りが中心となることから、やや弱含みで推移されると見込まれます。
	初妊牛	55～65	↑	
	経産牛	35～45	↘	
帯広管内	育成牛(10-12月令)	20～30	→	帯広管内の８月中旬までの生乳生産量前年比は、帯広管内月計で103.8%、累計で103.9%の実績となっております。９月の初妊牛動向といたしまして、11月下旬～12月中旬分娩が中心となります。初妊牛に関しましては、秋分娩から冬分娩が中心になり、出回り頭数も多いことが予想されますので頭数も十分に確保できる状況です。相場につきましては、秋に向けて需要が回復傾向になりますが、出回り頭数が多いことで横這いに推移すると見込まれます。F1腹の引き合いが引き続き強く、雌雄選別腹との価格差が生じている状況です。育成牛に関しましては、夏分娩になる月齢の育成牛の出回りが多くなりますが、引き合いは見込まれ、横這いで推移すると見込まれます。経産牛に関しましては、道内需要が見受けられますので、先月同様に横這いで推移されると予想されます。
	初妊牛	50～60	→	
	経産牛	40～50	→	
道北管内	育成牛(10-12月令)	20～30	→	道北管内の８月中旬までの生乳生産量前年比は、稚内管内月計で101.8%、累計で100.6%、北見管内月計で102.0%、累計で102.4%の実績となっております。９月の初妊牛動向といたしまして、11月下旬～12月中旬分娩中心の出回りとなります。全国的に暑く輸送・分娩事故を考え購買を控えている傾向が見られたため、涼しくなる９月から各地で導入の需要が多くなると考えられます。そのため取引価格はやや強含みに推移すると予想されます。経産牛に関しましては、初妊牛同様に暑さによる影響で生産性が低下する可能性が考えられることから、秋口にかけては即戦力となる牛の需要は強まると予想されます。そのため相場は横這いで推移すると見込まれます。育成牛については、夏分娩が期待される生まれ月が中心となることで需要は弱まり、相場は横這いで推移すると見込まれます。
	初妊牛	57～67	↗	
	経産牛	35～45	→	
道内総括	育成牛(10-12月令)	20～30	→	道内の８月中旬までの生乳生産量前年比は102.7%、累計で102.7%の実績となっております。９月の初妊牛動向といたしまして、秋口～冬にかけての分娩腹が中心の取引となってまいります。まだまだ暑い日は続くものと思われますが、涼しい気候に向かうこの時期は例年、導入意欲が徐々に回復し、引き合いも強くなってくるものと見込まれます。腹別により価格帯に差がある状況であり、F1腹に需要が集中し、雌雄選別腹は比較的安価で取引されるものと予想されます。経産牛につきましては、道内からの引き合いが特に強く、即戦力となる牛や産次数の少ない若い経産牛への需要は引き続きあるものと見込まれます。出回り資源につきましては、全体的には多い時期ではありますが、購買酪農家の牛舎に合った牛を選畜するため、お早目のご注文をいただきますようよろしくお願いいたします。
	初妊牛	53～63	↗	
	経産牛	38～48	→	

今月の表紙

今月の表紙は「第15回酪農いきいきフォトコンテスト」に応募いただいた作品「団子４兄弟🐄」（熊本県 宮本くるみ氏 撮影）です。

令和７年９月10日発行（毎月１回10日発行）
全酪連会報 ９月号 No.720
●編集・発行人 飯島洋一
●発行 全国酪農業協同組合連合会
〒151-0053 東京都渋谷区代々木一丁目37番２号 酪農会館
TEL 03-5931-8003 https://www.zenrakuren.or.jp/

編集後記

●厳しい残暑が続いていますが、体調には十分注意を払ってお過ごしください。
●８月からは飲用乳価が引き上げられました。最終的には、小売り各社の営業戦略や各店舗の判断ではありますが、末端小売価格は、標準的な１ℓ牛乳で平均10～20円の値上げとのことです。需要拡大・理解醸成がさらに重要となってくるかと思います。秋は、全国各地で農業祭りなどイベントが数多く開催されるシーズンですね。酪農への理解醸成や牛乳・乳製品の消費拡大PR等、酪農団体一丸となって、一層力を入れて活動して参りましょう！
●会報に関するご意見・ご要望等があれば、以下のアドレスにメールをいただければ幸いです。
shidoukikaku@zenrakuren.or.jp

今月の らくのうこどもギャラリー 入賞作品紹介

牛さん　ありがとう
千葉市立鶴沢小学校 1年（関甲信）　小幡 莉菜

今月の入賞作品は…
千葉市立鶴沢小学校 1年 （関甲信）の小幡 莉菜さんの作品です。
可愛らしい女の子が牛乳瓶を片手に牛さんを撫でて、ありがとうの気持ちを伝えています。女の子は莉菜さん本人ですかね、足元にはチューリップの花が咲いていてほのぼのとした雰囲気が伝わってきます。笑顔がいいですね。

※この作品は本会と全国酪農青年女性会議共催の「第51回らくのうこどもギャラリー」で全国304点の応募作品から入賞12点に選ばれたものです。

主催　全国酪農青年女性会議